京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024年7月29日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所属部局・研究科　農学研究科

職 名・学 年　博士課程・1年

氏　　名　増子聖士

助成の種類	令和6年度　・　国際研究集会発表助成		
研究集会名	Society for the Study of Reproduction 57th Annual Meeting 2024		
発表形式	☐ 招待　・　☑ 口頭　・　☐ ポスター　・　☐ その他(		
発表題目	Pcgf5 Transcribed from Endogenous Retroviral Element Has Important Functions in Mouse Preimplantation Embryos		
開催場所	アイルランド/ダブリン/Conference Center		
渡航期間	2024年　7月　15日　～　2024年　7月　21日		
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　☐ 無　☐ 有(　　)**		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	費　目	金額(円)
		航空運賃	
		宿泊費	350,000
		滞在費	
		学会参加費	
		その他	
		以上に助成金を充当	
当財団の助成について	本財団に採択頂き誠に有り難うございます。大変有益な国際学会とコミュニケーションの場でした。自身の可能性を格段に上げていただいた貴重な機会を有り難うございます。可能でしたら一度採用いただいた学生でも次年度またチャレンジ出来るとうれしいです。		

成果の概要 / 増子聖士

報告者にとって本学会が博士課程最初の学会参加であり、本学会初参加となった。同行者に同じく初学会参加でポスター発表を控える M1 学生 2 人を連れた責任重大の旅であった。
学会名は Society for the Study of Reproduction (SSR)であり、今年はアイルランドの首都ダブリンで開催された。SSR は今年で開催 57 年を迎え、コロナ空け初のヨーロッパ開催ということで過去最大規模で開催された。参加人数は 950 名を超え、ヨーロッパ圏だけで無く、アジア、アフリカ、アメリカなど各国からの名だたる研究者が集結した。

まず学会開催初日、報告者一行は The Journal of Reproduction and Development (JRD)という日本の生殖生物学を専門としたジャーナルのブースでの仕事が控えていたため、日本の研究者や学生との交流が出来た。JRD ブース設営において参加した大学は近畿大学、東京大学、神戸大学、大阪大学と様々である。ここでのコミュニティと繋がりが以降学会を楽しむ上で有益であったことは言うまでも無い。午後に開催されたウェルカムパーティでアイルランドの歴史を学べたことも収穫である。

2 日目、多くのポスターを拝見していくうちに、報告者のテーマが非常に珍しいテーマであることに気づいた。精子や子宮、卵巣を使った研究など、分野は様々で非常に刺激的であった。中でも、生きた雌マウスの卵巣にカメラを埋め、卵子が如何に運ばれるかを明らかにしたポスターは衝撃であった。さらに、精子と卵子の元である始原生殖細胞を世界で初めて体外で培養した、今や日本を代表する研究者である林克彦先生の発表を間近で聞けたことは一生の思い出である。さらに報告者の研究テーマの着想に至るきっかけを作って下さった研究者の発表を聞いた。研究内容は報告者の研究と近しいため本学会で一番に勉強になった演題であった。

最終日、報告者が口頭発表を行った。非常にニッチなテーマである故人が集まらないことを危惧したが杞憂であった。時間内で自身の発表を終えた後、質問も 6-7 人ほど並んでいただき非常に有意義なディスカッションの場であった。質問者には報告者が所属する研究室では知らない人はいない Prof. Wei Xue や報告者が本研究を行うきっかけを作って下さった Assistant Prof. Andrew J Modzelewski などがいた。質問は発表が終わった後も続き、彼らとの質疑応答を通じて、本研究の方向性が日本だけで無く世界において全く間違っていなかったこと、そしてさらなる成長と進化が求められることを再確認できた。報告者は去年、修士 2 年次に、人生初の国際学会での口頭発表を行った。練習は自分の研究データスライドに見飽きるほど行ったが、壇上では緊張のあまり最終的にはスライドのカンペを見る始末であった。その後も質問者は 2 人程度であり、大切な質問者への返答も中身の薄いものとなった記憶がある。しかし、あれから 1 年が経過した報告者は、様々な学会と発表を聞けた（本学会も発表日が学会最終日であったため、緊張感を維持しながら優秀な研究者の秀逸な言い回し、スライド構成を吸収できた）お陰で、そしてなにより去年に比べてずっと人との繋がりが出来たお陰で、純粋に自身の

研究の面白さを伝えたれたと感じる。今回自身のプレゼンテーションの際、大切にした点は1点のみで、イントロダクションの伝え方である。報告者の研究背景は複雑且つ長い。非常に分かりづらい。正直なところ、そんな研究背景は私にとってプレゼンテーション時間を圧迫する邪魔な存在としか去年まで思っていなかった。しかし著名な研究者は自身のストーリーに聞き手を引き込むうまさが違う。そこで私も「簡単に」、「重要そうに」、「背景知識を聞いただけでその後の結果がすんなり理解出来るように」構成、話し方を工夫した。それが功を奏したかは不明だが、前にも述べたとおりスムーズかつ有意義なディスカッションが、自身のプレゼンテーション時間で出来たと思える余裕が生まれたことは成長である。

最後に、このようなかけがえのない学びのチャンスを提供して下さった公益財団法人京都大学教育研究振興財団関係者の皆様と藤洋作会長に心より感謝申し上げるとともに、引き続き研究者のサポートをしていただけますと幸いです。